



僕は建築の設計を仕事にしているので、ある「場所」における「表現」という問題を常に考えてしまう。自分の設計する建築の建つ場所が、新興住宅地なのか農村集落なのか、町屋的な敷地割をもっているのか角地なのか、南に開けているのか高密度な旗竿状の敷地なのか等。世界にひとつしかないその敷地の性格に向き合うことなしに、その建築はリアリティーを獲得できないと考えているのだ。そんな職業病をもっている関係上、建築だけでなくアート作品を見る時も、そのよってたつ場所、地域性とでも呼べるようなことに意識が向く。

だから、SMFで埼玉でアートに携わる人々が集う場「ラウンド・テーブル」を開催すると聞いた時に、彼らとの対話や表現に向かい合うなかで、埼玉の地域性とは何かという問いに対する答えを得られるのではないかと期待をもっていた。ところが、何年か「ラウンド・テーブル」を続けていても、答えは見えてこなかった。見えてこないどころか、

その問い自体が、あまり本質的なところに食い込むような問いではないのではないかと考えるようになってきた。森林公園でアートのイベントを企画すると聞くと、自分の知っている空間ということでは想像が付きやすいが、そこから先に踏み込めるものでもない。宮代町のたんぼでアートを作っているグループは、特に埼玉を意識しているわけではないし、見沼区で泥を使った絵画を試みる画家の使う泥は浅間山産と、地域の設定自体があいまいになっていく。もちろん地域性を全く意識していない作家もいる。だから、当たり前のことだが、作家や鑑賞者の数だけ、地域との向き合い方は多様だというのが結論なのかもしれないし、埼玉県は大都市東京に隣接していることから生ずる性格を共有しているというところに、落ち着いてしまうのかもしれない。

しかし、今回「宝船展」を見せて頂いて、埼玉の地域性という問題を狭い意味での「場所」の問題として脇に置いておいて、もうすこし広い意味での「場所」を考えるヒントが見え隠れしているのを感じた。

「建築」と「場所」との間に、外構、門・塀といったものがあるように、通常、アート作品（特に絵画）とまわりの空間との間に、額縁がある。その額縁が、「宝船展」の作品では全くといっていいほど欠落していることに気がついたのだ。

絵画は、額縁によって場所と切り離されて、周囲の空間から独立した表現を成立させ、演劇もプロセミアムによって、観客席とは別の演劇空間を確保した。額縁の介在によって表現の不可侵領域を確立させたアートだが、「宝船展」の作品群は、するりと額縁を脱ぎ捨てた。いや、始めから額縁を必要としていない、さらに言うと、額縁その他、何かの枠の中に納まることとは逆方向のベクトルで「もの」がつくられているのではないか。

会場の埼玉県立近代美術館は、県展の時に多くの作品でいっぱいになる。その作品はほぼ額縁に入り、県の要職につかれた方々の名を冠した賞が与えられれば、さらにりっぱな作品となる。県展に出ること自体がステータスで、美術館自体も大きな額縁なのかもしれない。ところが、同じ美術館の展示室のはずなのに、「宝船展」を支配していたのは権威のピラミッドという枠組みとは無縁の、自由な空気だった。

そこでは、ある人の作品を見ようとする、他の人の作品も同時に視界に入ってくる。別の作品から距離をおいて見ようとする、床に置かれた作品を踏んでしまいそうになる。作品も空間も入り混じって知覚されるし、作品もそれを拒んでいない。

ここに、なにか独特の場所性を感じたような気がした。そのことをうまく説明はできないのだが、表現が場所へと滲みだす、あるいは、作品性が環境と溶け合うとも言えるような内容かもしれない。

SMFで問い続けてきた生活とアートとの問題にも、このあたりのことが関係してくるのではと思えてくる。場所と表現をめぐる旅は、まだまだ続くようだ。